

第7回 「日本語大賞」

テーマ「わたし私がつか使いたいことば言葉」



小学生の部 優秀賞 受賞作品

お粗末さまでした

千葉県

富津市立富津小学校

6年 森田 悠生

お粗末さまでした

千葉県 富津市立富津小学校 六年

森田 悠生（もりた・ゆうせい）

ぼくは年に数回、岩手県を訪れる。そこで必ず耳にする言葉をぼくはいつも不思議に思っていた。

『お粗末さまでした。』

食事の後の「ごちそうさまでした。」に対する応答の言葉である。ぼくが暮らす千葉県ではほとんど耳にしたことがない、ちよつと不思議な言葉。

ぼくたち家族がいつも宿泊する岩手県八幡平市の民宿の料理はとてもおいしい。たとえ豪華な食材を使っていなくても気持ちをこめて作られた料理は心の底から「おいしい！」と思う。けれども、民宿の女将さんは「お粗末さまでした。」と言って、いつもここに笑っている。

変な日本語だと思いつながらなんとなく聞き流していた言葉を、ぼくはあることをキッカケにあらためて見直してみたくなった。

民宿に宿泊していた別のお客さんが、「とてもおいしい料理なのに「お粗末さま」ってなんだかおかしい日本語ですね。」と、すつきりしない表情を見せていた。すると、女将さんは「残さずに召し上がっていただいた感謝の気持ちです。」と、答えた。

そのやり取りを聞いたとき、ぼくは日本語ってすごいと思った。

「お粗末さまでした。」という言葉は、心をこめて作った料理を残さず食べてくれたことへの感謝の言葉だったのだ。

最近の日本人は言葉をそのままに受け止めてしまう傾向があるように思える。

例えば、「つまらないものですが、……」という表現。人に物をあげるときによく使われる言葉だけれども、人によつてはその言葉は良くないと解釈する人もいる。

つまらないものをわざわざ人にあげるのをおかしい。だからその言葉は適切ではないという考えだ。

けれども、ぼくはその考えはあまり好きではない。日本語の中には言葉そのものの意味を解釈するのではなく、言葉の奥にかくされた真心を感じさせるような素敵な表現がいくつもある。それが日本語のすばらしさだと思う。

ぼくは料理が好きだ。遊びに来た友達に時々、料理を作ることがある。友だちは口をそろえて「森田の作った料理、うまい！」と言ってくれる。そんな時、ぼくは「そうだろ！ オレの料理、サイコーだろ。」と勢いづいてしまう。

でも、そうじゃない。本当はほくの作ったものを食べてくれてありがとう。「おいしい。」と言ってくれてありがとう。と素直に言ってみたいんだ。

きつとそんな気持ちを一言で表すと「お粗末さまでした。」という言葉につながるのだと思う。

心をこめて作った料理を食べてくれた人にほくもそんな言葉を自然と、そして素直な気持ちで言えるような大人になりたいと思う。